

フッセリアーナ資料集第1巻『「論理学」講義(1896)』を読む

富山 豊
(東京大学)

1. はじめに

本巻は、2001年に Elisabeth Schuhmann の編集によって『フッセリアーナ資料集』(Husserliana Materialien)の第一巻として公刊されたものである。編者序論によれば、主要部を成すテキストは1896年夏学期にハレ大学で行われた「論理学」講義であり、1896年4月24日から8月1日までの講義となっている。この講義のほかに、補遺として前年の1895年夏学期にハレ大学で行われた講義からの断片が収録されている。こちらは「演繹的論理学に関する最近の研究」と題されており、1895年4月26日から8月3日まで行われた。

本巻の主要部を成す1896年の「論理学」講義は、フッサール本人の証言に拠って『論理学研究』(とりわけ第一巻)のもとになった講義として知られている。

「純粹論理学へのプロレゴメナ」はその本質的な内容に関して言えば、1896年の夏と秋にハレ大学で行った、相互に補完し合うふたつの講義を単に仕上げたものに過ぎない。(XVIII, 12)

1913年に『論理学研究』第二版への前書きとして記されたこの証言に拠って、この「論理学」講義は『論理学研究』の生成史上とりわけ重要視されるテキストのひとつとなっている(なお、Mat. Iの編者序論に拠れば、1896/97年冬学期講義はこれと相補的な講義ではないとのことである)。

しかるに、本講義をじっさいに読んでみると、そこには「プロレゴメナ」で展開されたような心理学主義批判が集中的に展開されているというよりは、伝統的論理

学の教科書構成に沿って、概念論・命題論・推論論の順にそれぞれの区分内での様々な概念的区別が事細かに紹介され羅列されているという印象を受ける。公刊された『論理学研究』の中には必ずしもこれほど周到な形では見出されないこれらの詳細な概念的区別を逐一紹介するだけでも意味はあるが、論理学史に取り立てて興味のない大方のフッサール研究者にとってはおそらく煩瑣でもあるこうした諸区別の網羅的な紹介は紙幅も膨大に要するため、ここでは大まかな見取り図を示しつつ、『論理学研究』との対比におけるこの講義の位置づけという問題に焦点を絞って検討をしてみたい。

2. 『論理学研究』との対比という視点

あらかじめ『論理学研究』との内容上の関係を予告的に述べておく。

- ・『論理学研究』第一巻で展開される心理主義批判の結論、すなわち心的作用の実的な部分を成さない論理的な意味内実の承認、真理概念の担い手および論理学の対象をそこに求めるという主張自体はこの講義に既に存在する。
- ・他方、心理主義批判の論証部、すなわち相対主義への懸念等はこの講義では主體的には展開されない。
- ・意味と対象の区別(第一研究に対応)、断片と契機の区別(第三研究に対応)など、『論理学研究』第二巻における議論のいくつかは萌芽的に含まれているが、しばしば用語法がかなり異なる。
- ・「意味の部分」という発想は見られるため、第四研究にも一部対応する議論がある。
- ・スペチエスに当たるものはこの講義にも存在すると看做し得るものの、『論理学研究』第二研究の大部分を成す抽象理論批判の実質的な議論は見られない。
- ・対象への志向性を判断の文脈における意味論的振る舞いによって考える、

可能な述定との連関において対象の概念を考えるという初期志向性理論の基本的な方針が既にかなり明確な形で見られる。ただし、次に述べるように充実化の分析を欠くため、志向性の説明における正当化主義的な側面ははまだ前面に出ていない。

- ・対象概念と真理概念の結びつきは確保されているものの、真理概念自体をさらに分析するための充実化の議論は見られない。

以下、それぞれの論点についてテキストを基に確認していくが、その前に見取り図として本巻の目次を掲げておく。

【目次】

編者序論

導入的講義

- §1. 序論：思考作用とその客観的内実
- §2. 客観的表象と真理
- §3. (狭義の) 対象表象と命題 (名辞と言表)

I. 最広義における概念 (対象表象) とその対象

- §4. 概念の質料と概念の対象 (意味内容と対象)
- §5. 単純表象と複合表象
- §6. 表象の部分と対象の部分
- §7. 個別表象、或るもの、個体表象、抽象的表象と具体的表象
- §7a. 抽象体と性質
- §8. 内的性質と外的性質
- §9. 性質の性質。絶対的主語
- §10. 性質と述語
- §11. 概念の概念
- §12. 概念の対象

- §13. 徴表
- §14. 概念の内容
- §15. 概念の外延
- §16. 直接的表象と間接的表象
- §17. 帰属的表象
- §18. 純粹に概念的な表象と個体的表象
- §19. 総体表象
- §20. 個別的対象の性質と複数のものの性質
補論。関係：総体の性質
- §21. 結合と関係
- §22. 継起。並列的關係(Verhältnisse)、それを基づける關係(Beziehung)
- §23. 対称的關係と非対称的關係。系列、順序数
- §24. クラス表象と分配的表象
- §24a. 基数。数多性と総体性
- §25. 否定的表象
- §26. 表象の表象
- §27. 表象の同一性と表象の相等性
- §28. 表象の内容に関して言われる表象同士の関係
- §29. 概念の広さに関して言われる概念同士の比較
- §30. 概念の対象に基づく概念同士の比較と外延に関して言われる概念同士の比較
- §31. 外延の関係
- §32. 概念の区分。類と種
- §33. 対象の概念に基づく対象同士の関係。固有性
- §34. 包摂と従属（対象の概念に対するものと概念の概念に対するもの）
- §35. アリストテレス的類種

II. 命題について

- §36. 単純命題と複合命題
- §37. 命題、その否定と肯定
- §38. 最も一般的な命題結合：1) コプラ的結合
- §39. 2) 選言的結合
- §40. 3) 仮言的結合
- §41. 基礎的な命題形式の確定への移行

- §42. 定言的形式
- §43. この形式の外延的解釈
- §44. この形式の内容的解釈
- §45. 否定定言命題と否定の意味
- §46. 定言的言表のその他の区分：質
- §47. 全称肯定形式に対するジクヴァルトの分析
- §48. 全称肯定形式の主語の存在
- §49. 全称肯定形式に対するブレンターノの解釈
- §50. 特称肯定形式
- §50a. 否定命題
- §51. 質料の形式によって規定された、定言命題の多様な諸形式
- §52. 一般言表(*generelle Aussage*)の論理的内実
附論。一般言表
- §53. 非人称言表及び存在言表に関する論争
- §54. 存在(*Existenz*)と真理
- §55. 存在言表の意味
- §56. 定言命題における主語の存在
- §57. 単純な命題形式の類型としての存在命題と定言命題

III. 推論論

- §58. 因果命題
- §59. 推論の概念
- §59a. 因果的真理ではなく仮言的真理の法則としての推論法則
- §60. 論理的推論法則と非論理的推論法則、それに対応する仮言的真理の区分
- §61. 論理的推論法則の多様なクラスと理論
- §62. 命題的な推論法則のあるアプリアリな理論の構成に向けての前置き
- §63. あらゆる理論に先行しなければならないいくつかの根本法則
- §64. 命題的な理論の目的についての注記
- §65. 命題的な法則の理論
- §66. 概念的推論の理論

「演繹的論理学に関する最近の研究」講義(1895)から

理論的学科としての論理学

William Rowan Hamilton

Augustus De Morgan

George Boole

3. 客観的表象、表象自体、思想

「論理学」講義第一節「序論、思考作用と客観的内実」においてフッサールは、『論理学研究』第二研究におけるそれと同様に、心的作用のレアリテートを時間性によって特徴づけている。

学問的に訓練された思考者としてであれそうでない者としてであれ、我々が認識を得たり、認識を目指したりする際には、我々の内には様々な心的活動が推移していく。我々はあれこれのことを思い浮かべ、知覚や観察を為し、単称的な事実を全称化して仮説を形成し、こうした仮説を判断し、肯定したり否定したりし、もっともらしいと看做したりもっともらしくないと看做したりし、検証し帰納し、三段論法を通じて演繹的な帰結を引き出す。こうした心的活動はどれもそれ自体としてはなんらか個体的なものであり、それが属する心的な存在者のレアルな状態である。それはそれに割り当てられた時間持続のあいだだけ存立し、それが過ぎ去った時には再び無へと沈み込んでいく(*ins Nichts zurücksinken*)。そのときにはもはやその活動は、それがそれであるものとしては永遠に過ぎ去ってしまっている。後でまた等しい心的活動や似た心的活動が戻って来ることはあるかもしれないが、しかし相等性が同一性ではない。(Mat. I, 43-44)

こうして時間的に個体化された心的諸作用は同一のものとして繰り返されることは出来ないが、しかしそれらは同一の意味内容を持ち得るとフッサールは主張する。

さてしかし我々は、作用そのものは個体もしくは様々な諸個体であったとしても、そして作用そのものは時間切片もしくは時間諸切片であったとしても、そうした様々な諸作用は、全体としてあるいは部分的にある同一な内実を持

ち、なんらか同一的なものを志向ないし思念することが出来るという事実を指摘し、こうした客観的なものは作用自身と混同され得ないし、作用のレアルな断片とも看做され得ないということを認識しよう。(Mat. I, 44)

心的作用は時間的に規定されたレアルなものであるが、それに対してその客観的な内実はそもそも時間的な規定性やレアリテートに含まれる必要がない。(Mat. I, 45)

こうした同一的な意味内容は『論理学研究』では「イデアリテート」の名を冠されていたものであるが、この用語法は「論理学」講義には見られない。とはいえ、この同一的な意味内容、客観的内実ないし客観的表象こそが論理学の対象であることは第二節「客観的表象と真理」において明言されている。

馬についての法則は動物学に属し、主観的表象についての法則は心理学に、客観的表象についての法則は論理学に属する。(Mat. I, 44)

百人の人が明証をもって $2 \times 2 = 4$ と判断したとしても、百の諸真理が判断され（主張され、承認され）ているわけではなく、同一的にひとつの真理がそうされているのである。(Mat. I, 48)

しかしながら、真理の概念がこうした客観的表象に即して考えられるべきことは主張されるものの、『論理学研究』第一巻においてその主張を裏づけていたような執拗な帰謬法的論証は見られない。

また、この客観的表象という用語法がボルツァーノに由来すること、および（おそらくフレーゲの）「思想」と同様の意味で用いられていることは以下に明言されている。

さてそれでは我々は、ここで与えられているこうした客観的なものをどのように呼ぶべきであろうか。ここには術語が欠けている。ボルツァーノはこの目的のために、表象作用や心的現象に対置して「表象自体」や「客観的表象」という術語を用いた。他の者は時々、「思想」という表現を似たような意味で用いている。(Mat. I, 49)

このようにして、表象の客観的内実を超時間的に同一の客観的表象として特徴づけることによって、フッサールは純粹に理論的な学科としての純粹論理学を基礎づけようとする。すなわち、第一節においてフッサールは学問論ないし方法論としての論理学の根底にはそこから完全に独立した純粹に理論的な学科としての純粹論理学ないし形式論理学が存していることを主張し、その自立性は我々の思考活動における主観的なものと客観的なものの区別に基づいていると主張していたのである(Mat. I, 43)。

4. 『論理学研究』に受け継がれるいくつかの本質的区別

先に述べたように、本講義には『論理学研究』第一研究において論及される意味と対象との区別が明確な仕方が登場する。この区別を導く「論理学」講義第四節「資料と対象（意味内実と対象）」における第一の論拠は、以下のように『論理学研究』第一研究に見られるものと本質的に同様である。

「ソクラテス」、「アテナイの賢者」、「定義についての教説の定礎者」、「プラトンの師」等々の表現はすべて同一的に同じ対象に関係するが、しかし表象は異なっている。そしてそれは単に主観的表象についてだけでなく、それらの表現の意味は客観的に別のものなのである。(Mat. I, 54)

意味と对象的関係とを分かち、もっとも明晰な実例を我々に提示しているのは名辞である。名辞の場合、後者については名指しという言い方が一般に用いられている。ふたつの名辞は別のものを意味しながら、同じものを名指しうる。たとえば、イエナの勝者とワートルローの敗者、等辺三角形と等角三角形がその例である。表現された意味はそれぞれの対語において明らかに異なっているが両方とも同じ対象が思念されている。(XIX/1, 53)

しかしながら、「論理学」講義該当箇所における議論の特徴として、意味と対象との違いを単に多対一関係を論拠にではなく、客観的（イデアール）な同一性についての先の議論と結びつけている点が挙げられる。すなわち、レアールな対象としての現実のソクラテスは時間的に変化し、消失してしまうものであるから、

その表現を理解して用いる際に常にそれによって表現され、常に同一に留まる客観的なものは、もちろんレアルな客観ソクラテスではなく、それについての表象、我々の客観的な意味における表象である。(Mat. I, 54)

また、「論理学」講義からはこの区別を導くもうひとつの論拠を取り出すことができる。それは、第六節「表象の部分と対象の部分」において論じられるように、表象の意味内容と対象とではそれらを部分に分割する際の振る舞いが異なるという論拠である。すなわち、「山のない国」や「表紙のない本」という表象の部分として「山」や「表紙」を取り出すことができるが、それらの対象には山も表紙も部分として含まれない(Mat. I, 58)。また、「家の切妻壁」という表象においては「家」がこの表象「家の切妻壁」の部分であるが、対象においてはむしろ家の切妻壁が家の部分である(ibid.)。さらに、「ビスマルク」という表象は単純表象であって、対象であるビスマルクの身体的諸部分を逐一その部分表象として含むような複合表象ではない(Mat. I, 59)。したがって、主観的表象であれ客観的表象であれ、表象の内容とその対象とは区別されなければならない。

部分の概念について言えば、『論理学研究』第三研究において詳論される断片（独立的部分）と契機（非独立的部分）の区別はこのままの用語法で以下のように既に登場しているものの、第三研究におけるほど前面に主題化されていない。この理由は、以下に述べるように本講義における部分概念が主として述定との関係で考えられていることに因ると思われる。

私がある家を赤いと言うとき、赤さはその家の直観における抽象的契機であって断片ではなく、物理的な部分でもないが、しかしそれでもある仕方の部分ではある。(Mat. I, 60)

この区別が現れる第七節 a およびその直前の第七節は抽象体と具体体の概念を導入する箇所であり、述定されることなく主語にしかなり得ないものを絶対的具體体として特徴づける箇所である。

我々はまず、ある表象が個別的な対象を表象するのか、あるいは諸対象の総体、数多性を表象するのかという区別を記述的に際立たせる。前者の諸表象に限れば、個別的な対象はまずまったく未規定でありうる。こうして我々は、論理的にとっても重要な表象「何か(Etwas)」を獲得する。この表象の空虚に

対するほぼまったくの対極を示すのが、あらゆる固有名詞がその意味に対してもっているような様式における表象、ソクラテス、アフリカ、等々の、それゆえ個体表象である。そしてそれらに加えて、我々がその下に徳、白さ、数 4、等々のような抽象体についての、属性についての表象を理解するところの抽象的表象を我々は付け加えねばならない。別の対象と、我々が対象とその性質(Beschaffenheit) の関係、すなわち内属(Inhärenz) の関係と呼ぶところの関係に立つということによって特徴づけられる。各々の抽象体(Abstraktum) は、それが性質として住まう(einwohnen) 対象を隠れた仕方で指し示す(hinweisen)。徳は徳をもつ誰かを指し示し、赤さは赤い何かを、4 は客観の数(Objektzahl)4 をもつようなある集合を。別の対象に内属するということは明らかに、すべての対象についてあてはまるわけではない。ある対象にあてはまると述べることは、すべての対象について可能な意味をもつわけではない。「賢明さはソクラテスにあてはまるような何かである」と述べることには十分意味があるが、しかし「ソクラテスは何かにあてはまるものである」と述べることにはいかなる意味もない。ソクラテスは諸性質をもっているが、しかし彼はいかなる性質でもない。こうして一般に諸対象は、諸性質をもつが性質ではないような対象と、性質であるような対象に分かれる。前者は絶対的に具体的な諸対象と呼ばれ、後者は抽象的諸対象と呼ばれる。端的な具体者について語られるときには、しかし常に絶対的具體者が思念されているわけではない。すなわち、諸性質はふたたび諸性質をもつことができる。かくして、4 はあるひとつの集合の基数としてその集合の性質である。しかし、4 自身がふたたび諸性質を、たとえば2 で割れること、等々をもつのである。このことを顧慮して、「具体的」と「抽象的」という表は相関的なものとしても用いられる。ある対象は、それ自身がふたたびある具体者の抽象体であるか否かに関わらず、それが性質としてもつ抽象体に関して具体者といわれるのである。(Hua Mat. I, pp.59-60)

確かに我々は広い意味において、性質がその対象に付随するとか、内属すると述べることができる。しかし内属することはより狭い意味で理解することもでき、それによると抽象体は具体者の部分とみなされうるのであり、このことはそれ以外の場合には成り立たない。私が家を赤いというとき、赤さは家の直観における抽象的契機であり、赤さは家の断片、物理的部分ではないが、しかしまたある様式において部分である。赤さは家のうちに含まれる何

かであり、それ自体単独で家に所属するものであり、それゆえ直観的統一から単独で際立たせられるもの(Hervorzuhebendes)、単独で気づきうるもの(Merkbares)である。これに反して、その家はその教会より小さいと我々がいうときには、家の成素断片として把握されるべきものとして家のうちに住まうもの(innewohnendes)ではないものの、やはり家にあてはまるものであるところのこの「教会より小さい」という性質については、先ほど述べたことは妥当しない。それゆえ我々が内属ということ、対象と色、形、等々の関係において把握されるべきこのこれ以上記述されえない同居(Einwohnen)に限定するならば、抽象体の概念は的確な内実を獲得する。すると、抽象体がそのうちに住まう(innewohnen)対象は具体者である。するとこの概念対から、性質とその性質の担い手ないし基体という新たな概念対が切り離されるべきである。後者の対はあてはまり(Zukommen)の関係ないし述定的関係に対応する。(HuaMat. I, pp. 60-61)

このあてはまりの関係、すなわち述定の関係は、本講義において志向的关系を分析する際の重要な視点となる。この述定の関係を用いた特徴的な議論としては、第十節「性質と述語」における、「重さ」、「重いこと(重くあること)」のような性質と「重い」という述語とを区別する場面である。すなわち、「金は重い」と述べることはできても「金は重さである」、「金は重くあることである」と正当に述べることはできないため、述語とその対象化された形態である性質とは区別すべきであると述べられるのである(Mat. I, 64)。もちろん、「重さは金の性質である」や「赤くあることは色がついていることの一種である」のような性質についての高階の述定は可能であり、ここに『論理学研究』における名辞化の議論の萌芽形態がみられる。

さらに、『論理学研究』第四研究において登場する独立的意味と非独立的意味の区別も萌芽的に登場する。第五節「単純表象と複合表象」においては複合表象とその部分表象についてまず語られるが、その際、「鉄のような人(ein Mann wie von Eisen)」という表象の部分である「人(Mann)」や「鉄(Eisen)」はそれ自体が表象として意味を持つものの、残る部分はそれだけでは完結した意味を持たず、他の自立的な表現とともに成す文脈(Zusammenhang)において、全体の表現の意味に対して寄与を為すのみであるとされる(Mat. I, 56)。先に「思想(Gedanke)」という表現について明らかにフレーゲが意識されていたことを考えると、ここで「文脈」、「寄与」という言葉が用いられていることは示唆的である。なお、スコラに由来する「範疇的」、「共範疇的」という術語もここで言及されている。

ともあれ、『論理学研究』との相違について言えば、本講義ではまず表象を単純表象と複合表象に区分し、後者の分析が問題にされることによって非独立的意味が論じられ、後続の節で対象の側の部分について語られる。この点で、まず対象一般の部分について第三研究において詳述し、続いて第四研究においてそれを意味の分析に適用した『論理学研究』における論述とは議論の順序が逆になっている。

以上、『論理学研究』との比較において特徴的と思われることを述べて来た。後続の章節ではさらに概念について、また命題と推論についてその様々な様式や、それについて語る際の細やかな概念装置が詳細に議論される。それらについては前掲の目次から見当をつけていただくとして、ここでフッサールがこうした詳細な意味論的議論を行った眼目について一言触れておきたい。中世の代表理論がそうであったように、名辞や概念のレベルにおける意味論的分析が伝統論理学においてウエイトを占める背景には、誤謬論の伝統がある。推論を構成する各々の命題、とりわけ結論の妥当性が実験や観察、常識的な直観によっては容易に測ることのできない哲学や神学においては、慎重な意味論的分析なくして形式的に妥当とされる推論図式にあてはめただけでは、多義性やカテゴリー錯誤による誤謬推理が発生しがちである。このことは、抽象化が進みパラドクスの出現による危機意識を迎えることとなる黎明期の現代数学についてもあてはまる。こうした危機意識への対抗としての厳密化の運動にその学問的出自において深く関わっていたフッサールが、「論理学」講義においてこうした伝統的な概念論に大きなウエイトを置いた理由は、こうした誤謬論の伝統と無関係ではないだろう。